

## 近代日本人論\*

新津 靖\*\*

## 1. 緒言

私は一生、環境工学という学問をやってきました。皆さんご承知のように、「人は環境の動物なり」ということばがございますので、環境工学的に、人間と自然環境や社会環境の関係を考え、近代の日本人に適用すると、どういうふうに説明できるか、これは文科系の方の見方とは違ったものになるかとも思いますが、私流にお話いたします。

## 2. 環境への適応

人間以外の動物を見ますと、全く神秘としか思えない実に巧妙な環境への適応能力を持っておりますが、すべて先天的、遺伝的なもので、彼等が意識的に開発したものではありません。だから彼等には文化というものはありません。ところが人間だけが、環境への適応手段として後天的に、宗教、芸術、文学、そして科学技術というような文化を創造いたしました。これらは、「すべて環境がしからしめたんだ」という論旨です。

わたしは医学には全くの素人ですが、環境適応能力という機構を知りたくて、独学ではありますが、まず生理学、大脳生理学、心理学それから戦後急速に進歩してきた分子生物学なんかを乱読しました。

そして素人のわれわれは、これだけは知っておきなさいという結論……これをかいつまんで申し上げますと、こういうわけです。

わたし共は、環境からの刺激に対して、われわれの頭、すなわち、脳コンピューターはどう適応するか、その適応パターンの問題だということです。皆さんが扱かっておられる機械のコンピューターよりも、はるかに優秀な脳コンピューターです。

これが私共をとりまく環境、すなわちこれには自然環境もあれば、家庭環境、教育環境、社会環境もあり、皆さんの頭は、いま経済環境からの強い刺激でいっぱいだろうと思いますが、その環境からの刺激に対して、それに順応していこうという人と、それを回避しようとする人、これに抵抗しようとする人、いろいろの適応パターンが打ち出されるわけですが、その結果によって、皆さんの意思が決まる。こう打ち出された意志とか観念をフィードバックしまして、それを皆さんが納得する。その結果の決意と確信によって、はじめて行動に出る。これが人間の行動パターンです。

ところで、私どものつくった機械のコンピューターというものは、昔の真空管、現代のトランジスタから成り立っております。このトランジスタと人間の脳神経細胞の機能は非常によく似ておまして、これは要するに増幅器です。ところが、電子時計、テレビ、ラジオのようなもののトランジスタ配線は、人間が設計したものですから、これとこれを結ぶ、これとあれと結ぶというように、きまった回路をつくって電気を流しますから、何万台作ろうと、答えは完全に同じものが出てくるはずで、電子時計は、2,500個位トランジスタを使いますが、1か月に5秒ぐらいしか狂わないものができる。ところが、人間の脳コンピューターは白、黄、黒という人種の別なく、4億という大変な数の神経細胞からなり、その一つ一つの細胞から神経

\*この論説は新津先生が三洋電機本社および三和銀行本社のトップセミナーで行なわれた講演の録音ですが、先生独特の環境工学的史観は大変興味深く、教えられるところ多大ですので、ここに掲載させていただくことになりました。(編集部)

\*\*大阪大学名誉教授、三洋電機顧問、工博、環境工学専攻。

腺維がニョロニョロ出てきます。そして沢山の細胞が、まったく自然に配線されて行きます。これを現在の科学—手術や薬品によって、これとこれを結んで、これはやめようということとはできないのです。まったく自然にまかせるより仕方がない…。

そのでき方を見ますと、ちょうど蛇の舌と同じように、細胞から神経腺維が延びて行く。その伸びていく先端に毛のようなものが出て、これが結合すべき相手の神経細胞、すなわち「標的細胞」を探知していくんですね。こうして相手の細胞と結びつく。だから自然にまかすより仕方がない。従って、親と子でももちろん違う…親子の意見の断絶なんて太古からあって、決して現代だけの問題じゃない…(笑)。したがって、こういう違ったサーキット(回路)から打ち出される皆さんの意思なり思想には、当然そこに「個性」というものが出てくるのです。ここが人間の脳コンピューターのおもしろいといえればおもしろいところ…。谷崎潤一郎は「われという人の心はわれ一人、われよりほかに知る人はなし」という歌をよんでいます、そのものズバリです。そしてこの回路の形成は、だいたい10歳位までに完了することがわかっております。だから「幼児教育」ということが、いま、さかんにいわれていますが、回路配線をどうして完全なものにするかという問題です。

そしてもう一つ大事なことは、この神経腺維を生物電流が流れて、意志が決まるのですが、何しろ4億もの神経細胞の複雑きわまる回路結線、この配線である神経腺維が重なり、接触するところがいくらかでも出てくるわけですね。私どものつくった電気機械では、必ずビニールみたいな被覆をかぶせた線でつなぎますから、どこでもショートすることはありません。

人間の神経腺維の被覆のことを「髓鞘」と申しますが、知恵がつくに従って、この髓鞘がだんだんできてきてまして、やたらに裸線同志がショートしないようになる…。それじゃあ、この髓鞘はどうしてできるか。これはまったく生まれてからあとの、個人の勉強や体験を積むこと、すなわちいろいろの人生体験、勉強—自分の頭で考える—という後天的学習によって、こ

の髓鞘がどんなにもふえてゆくのです。要するに正しい判断を下す人間をつくるためには、「生涯教育」が必要というのはこれなんです。人間、いくつになっても勉強すればするほど、記憶回路と髓鞘がふえて、非常に合理的な正しい思考が出来るのです。

ところが、人によっては非常におかしなことをする者がいますが、まだまだこの髓鞘の裸のところがありまして、電流がショートするんで、非常識な思考が起こるのですね。それをわれわれは間違いと呼んだり、変わり者といいますがね。会社の玄関や交番に爆弾を仕懸けるバカ者なんかは、まったく「短絡思考」という奴なんですよ。これはいまの医学や科学技術ではどうしようもないんです。残念ながら、まだ「バカにつける薬」はございません。ここに後天的な学習、すなわち教育の重要性があるわけです。そして人間の脳コンピューターは自発的に作動して思考しますが、機械のコンピューターは、自発的には働きません。この点が両方の根本的に違うところ……。

### 3. 日本人は何故勤勉か

前置きが長くなりましたが、本論に入りまして、日本人の勤勉性、勤勉癖?はどのような環境から身について「国民性」といわれるところまでになったのか?

私は近代というのを、明治から100年と考えまして、そのバックにある徳川時代を考えずに日本人の国民性なり、意識構造を論ずることはできないと思うのです。これを環境工学的に、環境からの刺激に対する適応と見るのです。

この徳川時代270年というのは、これは歴史の先生方、誰もあまり重要視していない点ですが、おそろしく異常気候の連続でして、関が原の合戦のころから、非常な寒冷気候に入りまして、あちこち飢饉の連続でした。私ども、いままで偉い人を中心にした歴史ばかり習ってきましたが、その背景にあった危機的自然環境を無視するわけにはまいりません。

この270年間に、局地的な飢饉は150回起きていますし、大飢饉は20回も起きています。そのうちでもいちばんひどいのは、1642年の寛永の

飢饉、1,695年の元禄の飢饉、1,732年の享保の飢饉、それから50年ばかりたった1,782年の天明の飢饉。このときは3年ばかり飢饉が続きましたところへ、浅間山が大爆発いたしまして関東平野全部、灰で埋ずまって、不毛の土地になったのです。そのときは東北地方で20万人ぐらい餓死しております。続いて1,833年の天保の飢饉。そして餓死……ことばは簡単ですが、現代のわれわれは、終戦の時のひもじさの体験位で、全く食うものがなくて死ぬという、その深刻な極限状態なんか想像しても実感がわかりません。当時、死んだ人の肉を食べたといわれていますが、「天保荒侵伝」という本に、山中で、餓えた夫婦が人の腕を焼いて食べている絵がのっています。

したがって、百姓一揆は270年間に1,600回も起きております。しかし当時の制度では、上のほうから下へは命令がいくが、下から上のほうには意思が通らないようなシステムになっておりますから泣き寝入りです。それに今日のような流通機構なんてありません。

徳川時代の農民の生活がどんなに苦しいものだったか？ 当時は90%が農民で一現代は工業化したので農業人口は20%と逆転してしまいましたが、家康が天下をとってすぐ言ったことは、「百姓は菜種油と同じだ。生かさず、殺さず、絞れるだけ絞れ」でした。この生かさず殺さずの限界は6公4民という割合で年貢をとることです。これが自給自足で生きる限界なのです。中には島津藩のように8公2民というところさえあって、百姓は芋粥しか食べないのです。藩主は米しか年貢として認めない。来年の種籾まで出さなければならぬ家もある…。死にかけて病人の枕元で、竹筒に米を入れて振って音を聞かせ、「ああ、米のお粥が食べられるのか」とよろこばせたという哀話もありました。これを「振り米」といいます。農村へ行くと、百姓の要る塩、鍬、鎌を売るのは、城下町の許された特定の商人だけでしたから、これを差し止めたら百姓はお手上げです。

この生産者である90%の農民を、5~6%以上の非生産者の武士が支配したんですが、これはフランス革命時代の支配者の10倍でして、彼

等の収奪の下、農民は死にもの狂いで働かねばなりません。この生活苦から来る大衆の幕府に対する反抗を押さえて、勤労精神の方へ転換させたのが、徳川時代から明治、大正と続いた教育でした。

それでは幕府自体はどうだったか？

家康はばくだいな財産を残したんですが、3代将軍家光までの約50年間に完全に食い潰してしまっている……。それは家光の頃までに、東北地方と佐土が島の産金量がガクンと減ってしまったのに、彼は57万両かけて日光の東照宮を1年半で作らせた、10万人のお供を連れて、11回もこれに参詣し、また30万人を連れて京都へ上るといふバカ散財をしたのです。

それに生糸、砂糖、薬種の輸入で、金銀の流出も多かった……。従って4代家綱の時は、幕府の収入は天領420万石の年貢だけになってしまいました。従ってその配下の大名、武士というサラリーマンの生活も火の車にならざるを得ない……。彼等に金貸しをして財を積み、豊かな生活をしたのは、元禄時代の江戸や大阪の一部の商人だけです。

大体徳川の封建体制は家光の頃までにすっかり出来上がったのですが、ライシャワーも書いているように、これ程徹底した「警察国家」というものは世界に例がありません。完全に「知らしむべからず、寄らしむべし」で、士農工商と階級を固定してしまっていて、職業を変えさせない。一旦浪人した武士が再仕官するには、前の殿様の許可書が要る…。ですから浪人の末路は哀れなものでした。映画「七人の侍」の姿、あれが真実です。関ヶ原の合戦後、40万人の失業武士の浪人が出たんですが、これが今日の「やくざ」というものの起原になったのです。

百姓は田を売ってはならない、買ってもいけない…これを子供に分けてやれば、皆ジリ貧の5反百姓。そこで「田分け者」すなわちバカ者という言葉ができました。

大名が兵隊を動かさないように道は作らせない。東海道の道幅を、お駕籠が2台すれちがえるだけに制限し、そこら中に関所を作って、パスポートなしでは通れない。特に箱根の関の「入鉄砲と出女」の検問は厳しいものでした。こん

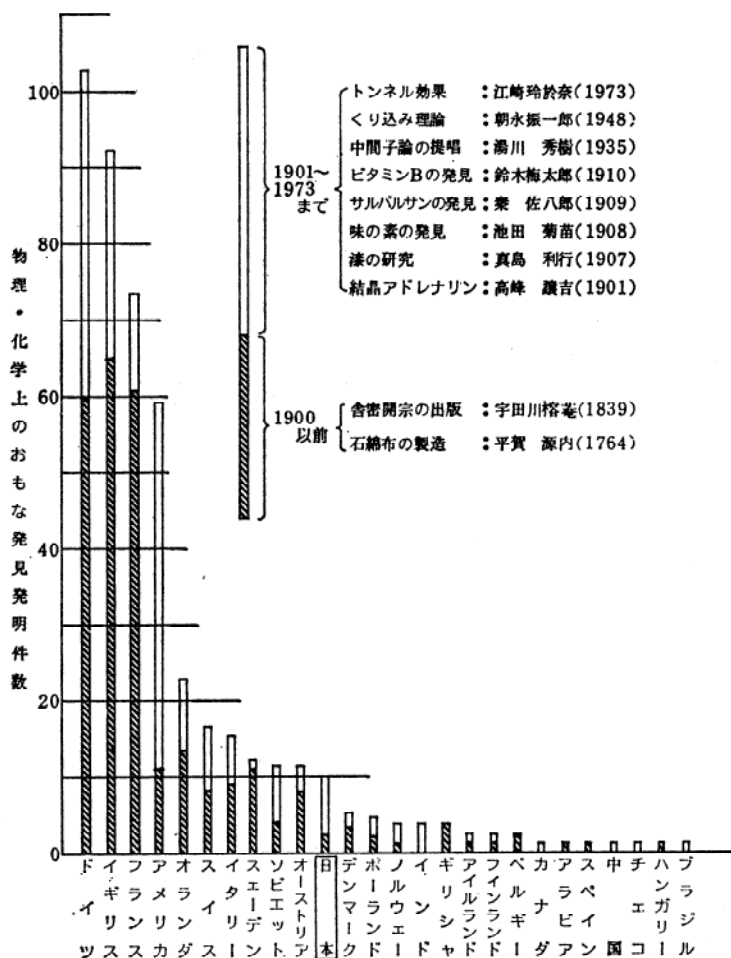
な状態で年貢だけ召し上げられる。これが本当の搾取です。そして今の税金のように、道や学校をつくるという国民への還元をしなかった…。

ところで、日本という国は80%が山でして、関東平野とか、淀川の水域とか、こういう平らなところ、いわゆる水田になるところは20%以下です。これが秀吉の時代に、もう水田になるところは開拓しつくされて、限界に達してしまっていて、北海道を別にして、本土では現在でも当時と田の面積は同じなんです。スイスも山国ですが、20度位の傾斜地が畑になっていますが、日本では30度の急傾斜のところまで畑があります。ですから百姓の生活は、当然もうギリギリの赤貧状態…。

そこで、親が生きるためには、子供の「間引き」ということが当然になります。徳川時代の人口は、ちょうど2,700万前後で増えていません。これは人口のカーブを描いてみますと非常にはっきりします。明治の開国から人口増加は急上昇に転じているのがはっきりわかります。

この間、生れる子供はたくさん殺されたんです。親が生けるのが精一杯なんですから…。

そしておまけに鎖国をやりました。なぜ、鎖国をやったかと申しますと、関が原の合戦当時、キリスト教になった人が30万人、家康時代は全部で100万はいたという記録がありますが、そのいちばんいい例が、キリシタン大名の小西行長です。関が原の合戦のときに、秀吉方だということだけで、彼は京都の三条河原で首を斬られました。まったく泰然自若として死んでいるのです。少しも恐れる様子がない。それから島原でキリシタンが1,000人以上も殺されましたが、首斬役人が恐れをなしちやって、「もうやめさせてくれ」と悲鳴をあげるぐらい安心立命の様子で、泰然として死についている。まったく信仰心の力で、「イエスのもとに行くんだ」という、むしろ喜びの表情で殺されている。それを役人がみて、もし日本に切支丹を広めたら、こういう熱狂の信仰心で団結して反抗されたら大変だというキリスト教に対する警戒心からです。



鎖国にしますと、亡命もできない。およそ世界の国で、亡命ができなかった国なんてのは日本だけではないですか。ヨーロッパなど陸続きですから、どこへでも逃げていけたが、日本では玄海灘と太平洋では、とても小舟で渡れない。非常に特殊な環境ですね。したがって、徳川270年間、警察国家という「和の原理」によって、幕府そのものは安泰であったけれども、残念ながら世界の大勢と、科学技術に対する目覚めは完全に遅れてしまいました。どの位遅れてしまったか？ わたしが理科年表から拾い出してグラフに表わした図でござらん下さい。これだけ差ができた理由はいろいろありますが、本題からはずれますので先に参ります。

以上が、日本人が無我無中で働かなければならなかった自然環境と社会環境です。そしてこの270年間続いた徳川時代の 大衆の生活危機、それから起きる社会不安、百姓が苦しいということは当然、幕府も弱くなる理屈でして、倒幕思想が起こります。幕末になりますと、商品経済の波が農村にまで波及して行きまして、百姓、町人の力がついてきまして、黒船渡来のショックで立ち上がったのが、マンネリ化した武士階級をつぶそうとする下級武士や百姓、町人出の人でした。

そしてそれに代わって、こんどは王政復古の明治になるのですが、開国、海外移住が許されて、まず最初にドッと出ていったのが、アメリカやカナダへの足がかりとしてのハワイです。そして今度は人口爆発を吸収させようとしたのが、朝鮮、満州への力による進出でした。

そこで明治政府は何を目標にしたかと申しますと、富国強兵でした。それにマッチした教育を徹底的に推進いたしました。なぜ、富国強兵と決めたかといいますと、結局、ヨーロッパ、アメリカは文化の面でも、生活程度の面でも非常に高い。それは当時、世界中が植民地帝国主義時代でしたから、やはり軍備をもって、兵隊が強くて、大砲や武器をつくらなければだめだという、これは明らかに西欧のモノマネですね。それまで、どんどんヨーロッパ人が東洋にもやってきまして、各国がまったく植民地獲得の覇権主義でしたから、東洋は彼等の草刈場でした。

しからばそういう教育は、どういう教育かといえますと、現在もそうですが、まったく画一、均質教育です。型にはまった均質人間をつくることでした。およそ、いちばん強い軍隊の要諦は、完全に均質な兵隊で構成するということです。一番弱い兵隊は傭兵で、傭兵で戦った国はすべて敗けています。てんでんバラバラの個性をもった集団では強い軍隊になりません。したがって、第2次大戦前までは、世界でいちばん強い兵隊は日本人でした。現代の世界でいちばん強いのはイスラエルの兵隊です。人口たった300万人のユダヤ教徒しかいないところを、まわりにイスラム教徒のアラブ人が6,000万人もとりに囲んでいるんですから、その危機感は彼等を火の玉にしています。わたしはエルサレムの「嘆きの壁」の前で祈る 彼等の真剣な顔を見て、不死鳥のような彼等の「生き様」というものをつくづく考えさせられました。

さて、富国強兵のためには、農本主義から脱皮して、どうしても工業立国を図らなければならない…。明治27～8年の戦争で、当時の中国から3億両の賠償金をとりました。当時、日本では3億両なんて大金、どんなにして使っていたかわからなかった。そこで、その内の62%を使って、まずつくったのが八幡製鉄です。今は「石油は国家なり」ですが、当時は「鉄は国家」でしたからね。鉄をつくって軍艦と鉄砲をつくらなければいかん……。そして大きな金が動きましたから、日本の大きな銀行は、みんな日清戦争の直後にできています。

日清、日露は植民地獲得戦争、日中事変は販路拡大戦争、大東亜戦争は資源獲得戦争。これを最後に、世界の国々の植民地覇権主義は影を消すことになる……。そして戦後30年の間に、ここまで日本の経済を持ち上げた原動力は、勤勉と均質教育から生れた組織力だといっよいでしよう。

ところで、その均質な教育制度というものにも問題があります。私は一生先生をやりましたが、非常にまずいと思うことは、日本の学校に特色というものをなくしてしまったことです。昔だったら、鉱山をやりたいかったら秋田鉱山専門学校、紡績だったら、信州の上田蚕糸専門、醸

造だったら広島高工、さらに海外にも旅順の工科学堂とか、上海同文書院というのがありまして、おれはひとつ大陸で働こうというような個性と、大きな夢を持った若い人たちは、中学を出たらそういう所へいけたんです。ところが、いまそういう特徴はまったくなくしちやって、大学も高校も画一化してしまって、均質教育をやる。こんどまた日本中、一斉共通入試をやるうというんですからね、こいつはもう受験地獄になるのはあたりまえなんです。何十万の競争馬を同じコースを、一つの決勝点に向けて走らせるのですから競育です。そして大学の格差だけは残しているんです。東大に注ぎ込む金と、地方の駅弁大学に注ぎ込む金には、まず雲泥の差があるのです。教師の揃っていること、研究設備も大差が現実にあるのですから、誰でも東大へ入りたいのは当然です。東大へ行けそうにもない商業高等学校とか工業高等学校のはやらないのはあたりまえなんです。東大へいける道が閉ざされるということがありますから、みんな普通高校に変質しようとしている。それで東大に電子工学科ができれば鹿児島大学にもつくれという。全国の大学はみんな東大の一挙手一投足を見守って真似をしようとしている……。大学に格差だけ残して、質を同じにしようというところに、非常に不満を感じます。粒を揃えるための教育では個性をのばせない……。

したがって、こういう均質教育からは独創性のある人間は出ないのです。むしろ独創性を蝕むような教育だと思います。したがって、全国に小、中学校は6万あるのに、学習塾が60万もあるという。結局、画一教育での競争がそうさせてしまうのです。みんな人間には個性があるのだからして、おれはどどこへいって、なにをやりたい、その青年の夢を満たすように、学校に思い切って特徴をつけて自由に選ばせる。そうしますと英才が出てくるのですがねえ。いまの教育は非常に残念に思います。

しかし文盲率はオランダと日本が世界一で99.8%。これも実は徳川時代の寺小屋教育からの伝統ですが、均質教育の強みの中に、資源小国の日本を、厳しい国際情勢の中でリードして行く知的エリート、英才教育の環境が是非加わ

るべきだと思うのです。

### 3. 日本人は何故教育熱心な国民か

徳川幕府が鎖国政策をとった理由は、前にちよっと触れましたが、信長、秀吉が手を焼いた宗教徒——向宗徒とかキリシタン——その宗教的信念は、幕藩体制にとって危険である……。そこで仏教は葬式仏教に落とし、なお国内に潜在するキリシタンを根絶するために、宗教の代わりに、政治学ともいうべき朱子学を国学と定めて普及させたのです。宗教的世界観に代わる哲学的理論体系として、朱子が大成した宗代の儒学ですが、仏教、道教、儒教から採長補短した学説です。

これは幕藩体制強化にはうてつけです。仁義、礼、智、信の五常、それから君臣の間の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序という五倫……これでブーブー不平を鳴らす武士や大衆を、弾圧と教化によって意識改革を計った。この音頭取が春満、真淵、宣長、篤胤の4人です。

まず武士の教育場として、命令で、藩校を200校つくりました。ここで論じたことは武士道で、武士の好戦性を、教養と領内経営の方向に転換させました。それから全国に寺子屋をつくらせました。これは6万位ありまして、いまの小学校、中学校の数と同じ位です。そしてそこで「読み、書き、ソロバン」を教えました。しかしその本質は何かといいますと、大衆は鎖国という状態で、重い年貢。ようやく命をつなげる自給自足で、とても苦しい生活状態でしたから、彼等に耐乏と勤勉と節約を教えたのです。そして「貧乏はけっして恥ではないんだぞ」という、「貧における道徳」を徹底的に教え込んだのです。「武士は食わねど高揚子」とか、「江戸っ子は宵越しの金は持たねえ」なんていうやせ我慢は、この「貧における道徳」でした。われわれが子どものときに習らった二宮金次郎がその手本でした。

ところで当時、いまから三百何十年も前に、国民の半数が読み、書き、ソロバンができたという知的レベルの高い国は、世界で日本ただ一つです。この点、明治の初めに欧米からやって来た外人教師がびっくりしていますね。そして維新となり、明治時代になりまして、これに第

2回目の刺激が加わる……。それは政府の高官がアメリカ、ヨーロッパへ派遣されて、まず彼等が全く驚いたのは、外国の機械文明の進歩です。岩倉具視でしたか、明治4年にイギリスへいきまして、その報告の手紙が残っていますが、あの汽車をみて、その驚き方……轟音をたてて疾風のごとく走るとか、マンチェスターの紡績工場をみて、布が川のごとく出てくるとか、鉄鋼船の造船工場をみて、もう度ギモを抜かれたという報告がきています。そこで、これはまず何としても、機械文明、物質文明を取り入れる教育から始めにやいかんということで、明治5年(1,872年)に、「学事奨励の太政官布告」というのを出しました。これは何をいってるかといいますと、いま読むとおもしろいですよ。「おまえら百姓、町人といえども、学問を身につければ官員さんになれる」、官員というのはいまの公務員、当時の支配者である役人のことで、誰でもこれになれるんだぞという。これはまったく画期的な教育の機会均等をうたったもので、国民に本当にやる気を起こさせた布告でした。和魂を残して洋才の勧め……洋才というのは西洋の機械文明のことです。

そこで、いちばん最初に小学校をつくったのはどこかといいますと、私の長野県の松本です。松本に開智学校といって、これはいまでも「重文」になって残っております。木造ですがイギリス人の設計で、イギリス風のとても立派な建物です。松本へいらっしやったら、松本城なんてあんなくだらんものはごらんにならなくてもよろしい。ぜひあの開智学校だけはごらんください。皆さんが昔習った教科書が明治の初めから全部揃っております。明治天皇も来られて坐ったという部屋もあります。日本で最初の最もモダンな小学校です。これが明治6年ですよ。そして寺子屋は、当時全国に6万位ありましたが、長野県だけで12,000もあったんです。その伝統はいまだに受け継がれて、長野県は教育県だということになっております。実はその背景は、90%が山で、平地は少なく、生きるためには学問技術を身につけて他処へ出て食うしかなかったからですよ。

こうして「文明開化」に政府も国民も狂奔し

まして、この時「舶来上等」という言葉ができました。その西洋文明を吸収するために、1,875年(明治8年)に、どのくらい外国人の先生が雇われていたかといいますと、500人もきているんですね。そしてその先生の書いたものをみますと、「日本人てのは実に勉強熱心で、理解が早い。ダーウィンの進化論を説いても、これを素直に受け入れ、理解する」と書いてある。当時、明治の初めごろ、アメリカでは、ダーウィンの進化論を学校で教えるはいけなくなっていたのです。人間は神様がつくったんだ、人間の祖先がサルだなんてとんでもないということで禁止されていました。日本へきてそれを話しますと、そうじやろうと素直に受け入れるのに外人がびっくりしています。ただし、当時、工業はまったくありませんでしたから、国民の90%が百姓で、明治の初めにもまだ寒冷気候でしたから、大衆の貧乏生活が続きました。

そして外国人のやるところをみて、これはやっぱり工業立国で強い兵隊と軍備をもって、ヨーロッパ諸国のように植民地を獲得しなければだめなんだと考えた……。

#### 4. 日本は何故工業量産大国になったのか

さて、工業においては、製品のマスプロをやらなかったら絶対に安くはなりません。商品を2倍作りますと、コストは25%下ります。従って現代の日本産業は、当然量産体制です。この大量生産体制を支えるものは何かといいますと、これまた、まったく「均質な従業員」です。日本の会社の従業員ほど、教育程度が高くて、粒の揃った国は世界中にありません。アメリカやヨーロッパの工場では、人種も、教育レベルも、国語もバラバラの外国人を使っておりますから、どうしても能率は上りませんし、製品むらが出てきます。

司馬遼太郎はうまいことをいっていますね。「日本の会社は一国家も一握り飯と同じだ。固って一つのおむすびだが、中身の飯粒は、すべて揃って均一な純米—日本人でできている」と……。これが日本の強味なんです。外国人の中に溶け込めない、外国籍の人を会社の役職につけさせない、国立大の教授にもしない、国

民年金にも入れさせない……この島国根性は打破すべきですね。

さてこの、「均質な一番強い軍隊を持った国」が、「均質な一番優秀な従業員を持つ近代工業の日本株式会社」に変わったわけですから、経済戦争に強いのは当然なわけですよ。私、経済のことは素人ですが、「戦争は弾丸を撃ち合う経済なり」、また「経済は商品を弾丸とする戦争なり」と言ってよいと思います。経済というのは、経国済民という手段ですからね。

さて、日本は現在、量産大工業国になりました。ところが、「日本はマークⅡの国」なんですね。皆さんコロナ・マークⅡという名前をご存知だと思いますが、マークⅡというのはどういうことかといいますと、これはイギリスの軍事産業製品の格付けです。これは2級品という意味ですね。ちょっとカッコいいからトヨタ自動車のペット・ネームにしたんだろと思いますが、なにかといいますと、小銃、戦車、大砲、機関銃、自動車、TV、ラジオ、船、これ全部マークⅡです。そこそこの工業力があれば、まあ、どこでもできる。日本の製品は全部このマークⅡです。そういう2級品だけに、企業忠誠心が強くて、身内意識の、この日本の粒の揃った優秀な人材を投入して量産をやったのです。これは、安くて良いものができるのがあたりまえです。そうすると、これは全世界に売れて輸出はさかんになる。これはまた当然、他国のシェアを占領することになり、その結果、これに対する脅威と反発が欧米で起っています。貿易戦争になったのです。

しかし、最近の欧米は感情的ですね。何時の時代でも、「強い者は理屈でものを言い、弱い方は感情でものを言う」。強くなった日本は、「安くて良いものを売るのは、資本主義経済の原則じゃないか。大体君達は勉強が足りんよ」という。あちらさんは、「それはそうだが、おれの方は食えない失業者が増えているんだ。困っている者を助けてくれてもよいではないか」と…親子げんかのパターンと同じですな。(笑)

それでは「マークⅠ」というのは何かといいますと、原爆、ICBM、大型宇宙ロケット。東大のロケットみたいに、どこへいったかわからん、

あれはロケット花火ですよ。月の上に人を送って、それを地球に帰させる宇宙ロケット。それからジェット大型機。翼や胴体のほうは日本でもできるんですが、世界中の航空会社が安心して買ってくれるジェットエンジンがまだできないです。こんどやっと自衛隊の練習機用のジェットエンジンが石川島播磨でできたくらいです。ロケットやジェットエンジンは、現代科学技術の粋みたいなものでしてね。それから超大型コンピューター。まだIBMにはとてもかなわない。

しかし、考えてみますと、このマークⅠなるものは、すべて戦略兵器です。これを開発するには経済なんか考えてはできません。ソ連と戦争して、どちらが生き残るかという、まあ決死的の技術開発ですから、ソロバンなんかってはやれません。ですからものすごい尖端技術です。考えて見れば、殺人道具でバカバカしいですが、こういう戦略兵器の周辺効果というものが、あとからジワッと大衆商品の進歩発達に寄与して行きます。これが恐ろしいのです。残念ながら、戦争の度に、革命的な技術が開発されてまいりました。激しい消耗を伴う軍需産業を興せば、会社としては儲かるし、科学技術も尖端に行くことになる。これが人類の幸福なのでしょうが？

##### 5. 日本人は何故無宗教的国民か

さて、日本人が無宗教的国民だということはよくご存知だと思いますが、いったいなぜ、日本人がこう宗教的にあいまいな価値観しか持たないかと申しますと、鎌倉時代の初め、これは戦国時代にはいる前ですが、1,200年ごろ、この時代も非常に寒冷でして、戦乱と飢饉が重なりまして、大衆は本当に生きるか死ぬかという時代でした。この時、平家はつぶれたのですが、皆さんが習った平清盛の贅沢なんて大したことはないんです。1,187年、寿永の飢饉で平家は滅びたんです。

このときには、平家の勢力範囲であった京都から西、九州まで全部が飢饉です。京都市内だけで42,000人餓死者が出ているのです。42,000人の死体は片づけようがないから全部、加茂川の両側に捨てたのです。その悲惨な、この世の



地獄という状態を、親鸞、道元、日蓮など、その時代の偉い天才的思想家がみて、各々独特の仏教思想というものを打ち立てて、衆生済度に立ち向ったのです。日本の仏教は538年に伝わってきまして、それまでは貴族を主とした信仰でしたが、この鎌倉時代に初めて仏教が大衆のあいだに定着しました。大衆は心から救いを求めたのです。これは1,200年代のことですね。

それから1,467年というのが応仁の乱ですが、このときも近畿はひどい飢饉でして、奈良と京都だけで8万人死んでいるんです。その苦しかった状態が、奈良の古い家の古文書に残っております。まったく木の根を掘って食ったという、それはわれわれには、ちょっと想像できない状態でした。

日本人の生死観の変遷というものを見ますと、この時代の人には全く「欣求（ごんぐ）浄土」「厭離（おんり）穢土（えど）」の思想だったようで、「一言（いちごん）芳談」なんか、「早く死んでこの世の苦しみと不安から脱出しよう」ということしか書いてありません。現代は全く逆で、みんな「現世利益追求の鬼」ですな。（笑）

そうして、そういう苦しさから、戦国時代でありますから、仏教信仰で固まった百姓、町人は、一向宗、日蓮宗、比叡山、高野山もそうですが、生活苦から団結して、当時の権力者、支配者に反抗したのです。

そこで、新しもの好きだった信長は、その仏教徒を抑えるために、キリスト教を許可したんです。ところが、こんどはヤソ教徒になったのが、やたらにお寺や神社を叩きこわして歩く…。当時、日本へ来た宣教師の中には立派な人もおりましたが、実は大部分が、まったくヨーロッパのゴロツキみたいな、強盗みたいなのがきているんですね。それで長崎から日本人をだぶ奴隷に売った奴もいます。そういうことからヤソ教禁止令を出しました。

家康はそういう宗教徒に、信長や秀吉が手を焼いたことを見えていますから、徳川時代になりまして、お寺と神社を徹底的に弾圧しました。そして壇家制というものを作らせて、大衆をある寺を指定して、そこに登録させる。寺を「戸

籍係」にしてしまい、坊主は死人の始末だけする葬式仏教にしちゃったんです。こうして仏教は骨抜きにされてしまい、それ以来現在まで観光寺か幼稚園寺。苔寺なんか、仏ではなしに、苔を拜むのに3,000円……。笑）そして、その仏教の代わりに、先ほど申しましたように、儒教を国学にいたしました。これは宗教じやございません。政治理念です。

ところが明治になりますと、今度は王政復古ということで、天皇の守り神は伊勢神宮ですから、こんどは国家神道ということになりました。今度は神社の格が上って、いわゆる廃仏毀釈が行なわれ、お寺の沢山の宝物はこわされたり、外国人に二足三文で売られちゃったんです。そしてお寺がもっている領地縮小、特権が廃止されました。こんなわけで、仏教が定着したと思ったら、こんどは儒教になり、その次は神道です。そこへもってきて、明治になって一神教のキリスト教も自由になり、大正時代には無神論のマルキシズムもはいつてきましたから、日本人の宗教的信念は、いったいどこにあるのか曖昧なものになりました。人が死んだら坊主がくる、結婚式には神主がくる、クリスマスはジングルベルで大騒ぎという次第です。そしてお盆がくれば線香も立てる。宗派の使い分けですね。（笑）

もっとも宗教という言葉の語源はラテン語のレリジョー—死の恐怖—という意味で、これは人間である限り誰でも—共産主義者でも—持っている深層心理ですから、「無宗教的」というのは、「特定の宗派信仰的ではない」と解釈すべきでしょう。

しかし、一面からみますと、これは日本人を非常に融通無礙というか、現実的国民にしましたね。異国文化の吸収に対して、抵抗思想をつくらなかったという点で、功績かも知れません。もし、これがイスラム教とか、一神教でしたら必ず衝突が起きたでしょう。一神教というのは恐ろしいです。人間が非常に強くなる一方、また非常に排他的、非寛容ですからね。イギリスのアイルランド、アラブとイスラエル、レバノン内戦の根元に宗教がある……。

ライシャワーは、「日本の大衆は非常に現実的

だが、学者には理想主義者が多い。この点、アメリカ国民とは全く逆だ」と指摘しています。徳川以来、昭和20年まで苦しい生活だったこと。それに日本程、自然災害—地震、台風、洪水、火山など—これの多い国はないのですよ。従って仏教の諦観思想も入って、日本人程「あきらめ」の早くて、また「立ち上り」も早い国民もいませんね。

こんなわけで、日本人は宗教に限らず現実的な国民として、受け入れられるものは何でも呑み込める体勢にあるということ……。これが科学技術であれ、思想であれ、文学、芸術、何でも呑み込んで咀嚼し、自分の栄養にしてしまう。日本人はダボハゼみたいな国民ですな。(笑)

## 6. 結論

そこで最後に、結論を申し上げます。日本人というのは、まず太古からこの島国で、1億1,000万になるまで、異民族に征服されずに、神武天皇がいたかどうか知らんが、それ以来、①同一言語、②同一民族で、③運命共同体的に、まったく身内意識で、④しかも自然の風物に対して実に繊細な叙情的感受性を持ちつつ暮してきた……「純粋培養民族」です。これが連綿と3,000年も続いてきた。それをごく最近、あちら産の民主主義というノリで巻いたけれども、中身は和魂、身内意識の純米のにぎり飯国民です。そして先ほどいいましたように、⑤平均レベルの高い均質教育国民です。⑥そこへ資源が少なく、⑦国土が狭くて、⑧人口が多くて、⑨雪が降る……。これでは勤勉な国民にならざるをえない。勤勉でなければ生きられない環境—これに適応した性格、国民性が出来たのです。

この環境工学的に、雪の降る狭い土地ということ、これも歴史の先生はあまりいいませんね。現在、世界の人口は42億ありますが、そのうちの25億、半分以上が、われわれと同じ東洋人です。その東洋のうちで、日本という1億1,000万の国だけが、一番北のほうの、雪の降るところに位置していて、天災の多い国です。ですから11月から4月までの半年、雪がとけるまでは、米も野菜もできない。2毛作、3毛作もできる

南方諸国と違って、夏の暑いときに、汗を流して米をつくって、冬の間はそれの「居食い」で生きなければならん。これでは勤勉ならざるを得ない自然環境です。

ですから世界をみても、文明が栄えるか栄えんかは、雪が降るか降らないか、ということでもいえると思いますよ。これが人間にとって恵まれているのか、かえって不幸なのかわかりませんが、今日、日本人の勤勉性を裏付ける大きなひとつの環境的要素であるというのが私の考えです。

そして戦後、国防はほとんどアメリカに任せて、すなわち勝ったアメリカをガードマンに雇って、—これが原爆、ICBM持っているから大丈夫(笑)—。国防費なんて0.8%。ソ連のいまの国防費は20%ですよ。そしてジュウタン爆撃を受けて、まったく壊滅したあと、何もなくなったんですから、最新の設備を入れたのです。イギリス経済の遅れは、戦争前のガタガタ機械がまだ残っているという点も一つありますね。日本は全部最新の新品。そして幸いに原爆の抑止力が働いて先進国同士で戦争もなかったこの32年……。

ただし、局地戦争はありました。終戦後、世界中で局地戦争がいったいくらあったか、私が数えてみたら、50回ありますよ。世の中、平和だなんていうけれども、イスラエルなんか何回、戦争やったか。ベルリン騒動からはじめて、ベトナム、中東戦争なんかで、終戦後50回ですよ。

これで手を汚さなかったのは日本だけです。それで佐藤栄作がノーベル平和賞をもらったんです(笑)。いや、アハハじゃないですよ。日本人のみりと外国人のみりとは視点が違うんですよ。外国に武器も売らず、ケンカ仲間にも入らず、そして日本は平和を守った。これは偉いというんで、佐藤さんが代表して平和賞をもらったのです。

そうしておきながら、日本は着々と、こんどは、経済戦争—鉄砲玉の戦争の代わりに、商品を弾丸とした経済戦に国をあげて立ち向かったわけです。

したがって、結論はこうみます。これは私の

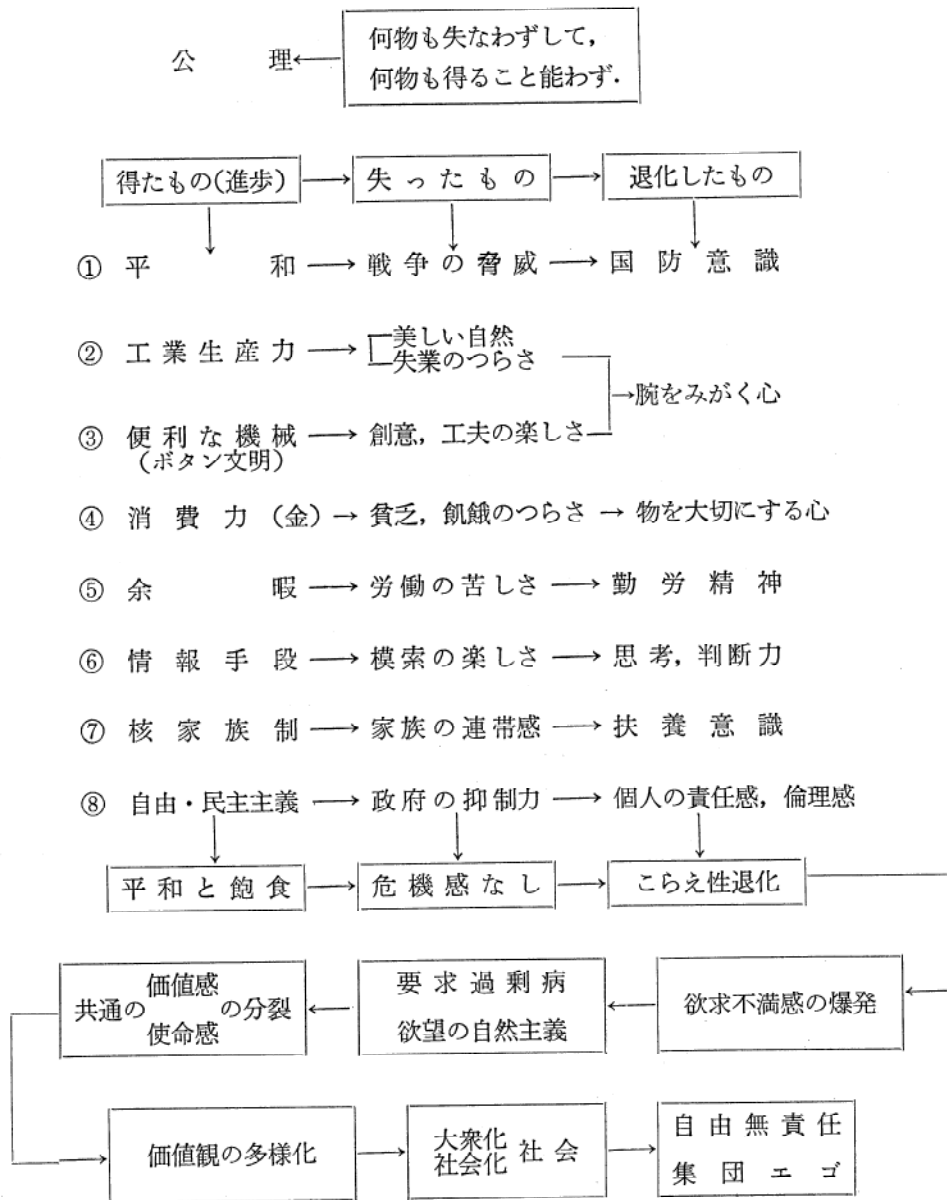
方程式ですが、資源を、すぐれた均質な英知と勤勉な労働力で加工して付加価値を生む。これが国民総生産ですね。それを人口で割る。そうすると1人当りの1年間の個人所得が出ます。個人所得はアメリカが150万円です。日本が2位で100万円です。イスラエルが75万円です。イスラエルはたった300万人しかいませんから、これは大きくなるのです。中国、インドは43,000円……。それからこれを積分したものがGNPだと思えます。このGNPはアメリカが1兆6,900億ドル。このアメリカさんには及びつきませんが、日本が2位で、5,600億ドル。西ドイツが4,200億ドルです。フランスが3,400億ドル、イギリスが2,300億ドル、カナダ

が1,600億ドルです。これ1, 2, 3, 4, 5, 6と並んでいるので覚えやすいですね。

まあ、考えようによっては日本という国、日本人というのは、われながら、ものすごいバイタリティを持った国民だと思えますが、どうも日本人というのは、周囲から圧迫される環境に置かれると、火の玉になって団結して立ち向う国民で、東洋のユダヤ人みたいだと思うのですが、さて問題はこれからです。

その問題というのは二つです。

第1は資源の全くない日本が、むやみに、鉄鉱や油を買い込んで、量産をやり、集中豪雨的の輸出で、商品のシェア拡大戦争を、このまま一体続け得るのかどうか。これは皆さん経済人



の考えていただかなければならぬ大問題です。産業構造の大改革で、日本民族の生き残る道を探さねばならぬのじゃあないか？

第2は、わたしのように教師をやった者から見て、気にかかること、すなわち、国民の意識の変化です。

「何物も失わずして、何物も得ること能わず」、これは経済の面でも、工学の面でも原則です。これを意識の面に当てはめて、私流に分析しますと、次の表のようになると思いますが、

これは皆さん見ていただければ一目瞭然ですが、平和で、満腹し、危機感がなくて、こらえ性がなくなると、人間はどうなるか？

皆さんの会社の収支決算と同じで、得たものと、失ったものの差が、日本人の将来に、黒字として出るか、赤字となるのか？ その結論は、経済界のリーダーであられる皆様一人一人のご判断にお任せしますが、わたしは先程、「貧に

おける道徳」ということを申し上げました。徳川時代から明治、大正にかけて、苦しい自然環境と社会環境が、わたし共に耐乏、勤勉、節約、学問という適応を強いてきたように思うのです。その結果、今、われわれは開闢以来の平和と鼓腹の時代にいると思いますが、知足安分、「富に処する道徳」というブレーキが必要だと思うのですがいかがでしょうか？

人間の意識構造というものは、途端に180度転換できるものではございませんで、長い間の封建制、昭和20年までの帝国主義の残滓がまだ残っております。敗戦国の歴史を調べて見ますと、敗戦の後遺症は100年は続きますね。資源小国の日本人が生き残る道は何か？ その模索の苦しみにさしかかっているのが、現代の日本人だと思います。

どうも長時間ご静聴ありがとう。（拍手）